



特集 韓国と日本

2019年第5回「日韓脱核巡礼」東北

■光延一郎（日本カトリック正義と平和協議会秘書、平和のための脱核部会会長）

日本カトリック正義と平和協議会平和のための脱核部会では、毎年、韓国のカトリック脱核グループと巡礼・懇談を通して交流している。今年はその第5回目として、韓国から11人を迎え、8月26日から31日、福島県三春町と仙台、および青森県下北半島を訪問した。おりしも日韓政府の関係が険悪となり、日本社会に韓国叩きが氾濫する時に訪日して下さった韓国チー

ムには心から感謝申し上げたい。

●福島県三春町訪問

巡礼のスタート三春町は、郡山から磐越東線で阿武隈山地に少し入った所、福島第一原発から西へ40～50km、しだれ桜が有名な山あいの美しい町である。初日の午前中は、福島県がここに県民の放射線被曝への不安に応えるために

設置した「コミュタン福島（福島県環境創造センター）」という立派な施設を訪ねる。展示について説明員が同伴し質問に答えてくれるし、バスの切符まで準備してくれる至れり尽くせりのサービス。360度に映し出される最新鋭の映像装置は、団体訪問する小学生などの度肝をぬくだろうが、その内容は総じて「原発事故はもう終わった、オリンピックに向けて復興だ」との宣伝であり、原発事故の負の側面（健康検査、賠償裁判など）については語られない。

午後は、三春在住で原発事故被害裁判にかかわる武藤類子さんと懇談する。コミュタン福島では出なかった話、武藤さんご自身がかかわっておられる東京電力元経営陣を訴える「東電刑事裁判」についてのお話をうかがう*注。2011年9月19日に東京・明治公園で開催された「さよなら原発5万人集会」での武藤さんのスピーチは韓国でも知られており、韓国からの参加者も武藤さんの人柄に感銘を受けたようだった。

●仙台から六ヶ所村へ

次の日は仙台に移動し、仙台教区カトリック元寺小路教会にて、ルポライターの鎌田慧さんを講師に迎えての公開講演会。弘前出身の鎌田さんは、故郷青森県の核開発問題について若い頃から取材を続け『日本の原発地帯』（1982年）『六ヶ所村の記録』（1991年）『下北核列島』（2011年）などの著作や「さよなら原発1000万人アクション」呼びかけ人の一人として、脱原発運動に取り組んでこられた。鎌田さんは、会場からの質問への答えの中で、日本国民の民主主義的自覚の乏しさを韓国の人々との対比において訴えておられた。

3日目は朝早く起き、鎌田さんもご同行いただき新幹線で一路八戸へ、そこからさらにマイクロバスで下北半島を北上する。土地の買い占めで、かつての農地や街並がすっかり原野にもどってしまった六ヶ所村の景色は、緑の豊かさ、点在する沼と海の水の青さと六ヶ所核燃料再処理工場（建造中）などの無機質な核施設との対比が印象的だった。鎌田さんの紹介により、長



福島県三春町にて武藤類子さんと和やかに会談する一行

年、再処理工場反対運動を続けてこられた地元住民の方々のお話をうかがう。また核問題に関心深い鎌田ひとみ監督のドキュメンタリー映画『六ヶ所村ラプソディー』（2006年）で「花とハーブの里」の活動が紹介されていた菊川慶子さんと懇談することもできた。六ヶ所村の人々と核施設との関係を描いた映画としては、1990年から2002年までは六ヶ所村に在住した島田恵監督による『福島 六ヶ所 未来への伝言』（2013年）もある。さらに古くは、水俣問題に取り組んだドキュメンタリー映画の巨匠・土本典昭氏の『原発切抜帖』（1982年）や『海盗り - 下北半島・浜関根』（1984年）も、ぜひDVDでのご視聴をおすすめする。

原発マネーによるものか、立派な道路と家、役場や会社の建物が並ぶ六ヶ所村、泊漁港、その先の東通村を通過。人家乏しい原生林の中に忽然と現れる東通村中心部の景色にはとりわけ驚いた。人影はほとんどないのに、建物は超近代的。まさに原発に象徴される科学技術文明と人間の、自然とのアンバランスを象徴している。東電と東北電力が保有する東通原発の敷地は広大であり、そこは将来、原発のゴミ捨て場になるのではないかとの憶測もあるらしい。今は、東通原発が止まっているため、補助金の途絶えた東通村の財政が危機的だとのことだが。

●「あさこはうす」、大間原発、女川原発

4日目は、本州最北端の大間崎へ。対岸に北海道の大地、とくに函館山が間近に臨まれる。

ここは津軽海峡が最も狭くなる場所であり、対岸までは直線距離20キロメートルに満たない。そのため北海道、特に函館市からも大間原発の凍結が求められている。

もともと水力発電を手がけてきた会社「電源開発」が建造する大間原子力発電所は、ウラン燃料でなく、使用済核燃料の再処理が前提となるMOX燃料で発電するもの。大間町議会は1984年に誘致を議決したが、しかし着工は2008年5月ようやく始まった。それは、炉心建設予定地付近の土地を所有する地権者熊谷あさこさんが原発建設に反対し、最後まで買収に応じなかったためである。その志は今も、ログハウス「あさこはうす」でがんばる娘の小笠原厚子さんに受け継がれている。一人きりの抵抗によって、大間原発の建設計画は見直され、原子炉設置許可申請も変更せざるをえないこととなった。たった一人でも、強大な権力に打ち克てた事実は、巡礼団を勇気づけた。核燃サイクルの先行きの暗さから大間原発が完成するかどうかは不明であるが、今も小規模な工事は細々と続けられる。いくら工事を続けても、住民が支払う電気代からの資金は無尽蔵であり「カネだけ、今だけ、オレだけ」の利権構造は磐石なのだろう。

再び仙台に戻り、金曜日の夜に市民が毎週行っている「脱原発金曜デモ」にも参加。最終日は、女川原発建設反対運動に参加されてきた「みやぎ脱原発風の会」の篠原弘典さんから、女川原子力発電所（東北電力）の歴史について学ぶ。福島原発事故の陰で報道から隠されていた女川原発も、実はギリギリのところで大惨事を免れていたことを知った。

●脱核で日韓を結ぶ

広大な下北半島を巡って、今、目に浮かぶのは、茫漠と広がる山野。そしてそこに点在する、米軍・航空自衛隊の三沢基地、六ヶ所核燃料再処理工場、東通と大間の原発。これらの点が結ばれ、下北半島は日本で最も危険な地域となった。冬の風雪ばかりか、夏も「やませ」と呼ば



8月29日夕方、むつ市大湊教会で信徒の方々に迎えられミサを捧げた。

左から、アントニオ・マルコ神父（大湊教会担当）、イグナシオ・マルティネス神父（カトリック中央協議会）、ホー・チャンラン神父（韓国チェジュ教区）

れる冷たい北東風により、農産物が絶えず冷害に脅かされた大地と海の幸で生きてきた人々。大陸から帰還し、原野を必死に開拓した人々の畑地は、政府と財界の共謀によって買収されたり、計画が失敗したり、頓挫したり。それに振り回された住民は、結局分断され、共同体は離散し、人々の心に深い傷が残った。「国策」事業につぎ込まれるカネは尋常でなく、その施設は巨大で、部外者が入りこむスキはないように見える。しかし、そこを出入りする人々のこわばった表情には、人間らしい喜びや笑いは見えなかった。それに対して、今回、私たちが出会った武藤類子さん、鎌田慧さん、菊川慶子さん、小笠原厚子さんたちの人間的な豊かさはどうだろう。日韓関係険悪化の根本原因も、植民地支配とその人権侵害についての日本政府の反省のなさと人情のかけらもない対応だ。それは、核兵器や原発、基地建設や軍拡と底でつながっている。

しかし同じイエスの福音の実現を目指す私たち「日韓脱核巡礼」には国境などない。核開発の暴力性から自らの人間としての尊厳を守ってきた人々の姿に接した私たちの旅は、平和の小さな証となったと思う。

*2019年9月19日、業務上過失致死傷罪で起訴された東京電力旧経営陣の3人の被告に対して、東京地方裁判所は無罪の判決を言い渡しました。

日韓脱核巡礼団に同行して

鎌田 慧 (ルポライター)

本州最北端の下北半島。そのまた最果ての大間崎にむかう細い道をクルマで走るとき、対岸に長く伸びた北海道の台地がみえてくる。

その日は薄曇りだったが、右側、津軽海峡のむこうに、函館山がくっきりとみえた。「日本カトリック正義と平和協議会」の日韓脱核巡礼団の小型バスは、大間原発建設に抵抗している「あさこはうす」にむかっているのだが、わたしはバスの左手、山側の崖下にときどき姿をあらわす、巨大なコンクリート構造物について説明した。

「戦時中に、大湊湾の軍港から下北半島の先端大間崎まで、軍用鉄道を引く計画がありました。完成する前に敗戦を迎え、中止になりました。その跡です。工事には朝鮮の人たちが大勢動員されていたのです」

バスに乗っているひとたちの約半数が、韓国からきていたひとなので、是非伝えたかったことだった。わたしの長兄は、戦時中、「徴用」で大湊（現むつ市）にいた。いま94歳だから、当時は18、9歳。身体が弱かったから軍隊に「召集」されなかった。仕事はなにをしていたのかよくわからないが、商業学校出だから帳簿付けかなにかだったであろう。

いちどだけ、母親に連れられて、兄との面会に行ったことがあった。海軍の宿舎に泊まった記憶がある。当時では珍しいパン食だったのだけ覚えている。戦後になって、兄は「使われていた朝鮮人が可哀想だった」といったことがある。虐待を見ていたようだった。

軍港と鉄道建設。そこに徴用されてきた大量の朝鮮人がいた。兄と同じ「徴用」であっても、植民地から強制的に連れてこられた「徴用工」と日本人の「召集」（徴兵）からはずれた「徴用」労働者とは、天国と地獄のちがいだっただけだ。そのとき、大湊に朝鮮徴用工がどのくら

いいたのだろうか。

戦後になって、故国に帰るひとたちを乗せた「浮島丸」は、大湊港から釜山にむかう途中、舞鶴港内（京都府）で、米軍が投下した機雷に当たって沈没、3700人の乗船者のうち、549人が死亡した。乗組員の犠牲者は25人（出所・ウイキペディア）。が、最近の韓国でつくられた映画では、犠牲者は8000人、沈没は機雷ではなく、船内での爆発、とされているようだ。

バスの中で、わたしがいままで日本で伝えられてきた「浮島丸」の話をしたのは、長崎港外の海底炭鉱「軍艦島」でさえ、朝鮮人の強制労働の歴史を抹殺する動きがでてきたからだ。

三菱、三井、住友などの大炭山はもとより、麻生太郎副首相の「麻生炭鉱」でも、朝鮮人強制労働があったことは、歴史的な事実である。

これらの事実が学校教育で教えられていないのは、国際的な隠ぺいといっている。わたしはむつ市から大間崎にむかうとき、強制労働の歴史的遺構、挫折した未完の鉄道を眺めながら、使役されていた朝鮮人の姿を思い浮かべる。それは長兄が見たであろう光景の再現でもあった。

浮島丸に乗った人びとの故郷を眼の前にして、海に没した無念を思い、わたしはバスの中の韓国のひとたちに、マイクを握って「無事に帰せず申し訳ない」と謝罪した。

秋田県大館市の山中に建っている「中国殉難烈士慰霊之碑」は、花岡鉦山に強制連行されてきた中国人労働者を慰霊するものである。

1944年7月から45年6月まで、国の政策で中国から強制連行され、花岡鉦山鹿島組（現鹿島）に配置された労働者979人のうち137人が、河川工事などの重労働と暴行による負傷や病気などで死亡した。45年6月30日、圧政に耐えかねた800の労働者が蜂起、逃亡した。憲兵

隊、警察、警防団が出動して山狩り、逮捕、連行、暴行を加えた。さらに食事も与えず路上に放置し、大量の死者を発生させた。残虐だった。

恥ずかしいことだが、植民者意識に捉われていた市民は、植民地化から連行してきた人間を人間としてみななかった。対等な人間関係はなかった。

日本人の慣れない支配者としての存在、その不安が恐怖に変わるのは、関東大震災のときの「朝鮮人が井戸に青酸カリを投げ込んだ」とするデマの流布と街頭での虐殺にあらわれている。

大間へむかう前、わたしたちは六ヶ所村をまわっていた。ここは「核燃料サイクル」の失敗の地である。まだ、失敗だった、と政府や電力会社が認めているわけではない。しかし、1984年に計画が公表されて（実際は69年当時から計画があった）、35年たっても、中心の核再処理工場は完成していないし、完成の見通しはまったくない。

ウラン濃縮工場は生産中止、MOX（ウラン・プルトニウム混合燃料）工場も建設停止。瀕死の状態であることを、70年から取材しているわたしは、このツアーのはじまりである仙台での講演会で断言している。

わたしは六ヶ所村の元村長・寺下力三郎さんの話をした。彼は六ヶ所村長として、開発に身体を張って反対した。なぜかといえば、彼は北にある朝鮮窒素（チッソ）興南工場の監督工として働いていたことがあったからだ。

日曜日に工場のまわりを散歩すると、掘建て小屋が立ち並んでいた。聞いてみると、チッソが工場を建設するために強制立ち退きさせられた人々の家だった、という。

また工場内では、朝鮮人労働者は名前では呼ばれず、「おいヨボ、ヨボ」と鼻先で使われていた。それがいやで寺下さんは、1年ほどで帰国、六ヶ所村役場に入った。彼は金さん、崔さんと名前では呼んでいた。帰国する前、その労働者たちに送別会をやってもらった、という。

彼が助役から村長になったとき、六ヶ所村は



種市信雄さん（写真右）と話す鎌田慧さん（写真中央）

「巨大開発」される計画が発表された。有無を言わせない財界と政府の計画だった。寺下さんの脳裏に浮かんだのは、朝鮮窒素のことだった。こんどは村民がおなじ運命になる。

それを阻止するのが村長の仕事になった。が、二期目の選挙は賛成派が小差で勝利した。小さな村の選挙に膨大なカネが投入され、選挙違反が白昼堂々とおこなわれた。

寺下さんをご存命だったなら、途中でお宅へお寄りして、朝鮮窒素のことを語ってほしかった。いまの安倍政権と御用マスコミの、恥さらしな、夜郎自大、旧植民者意識の、「嫌韓」「断韓」騒ぎ。「無礼」と叫ぶ大臣、韓国大法院への政治的批判、そして自分の首を絞める「輸出規制」。

寺下さんは「偉そうですね」と皮肉っぽく言うはずだ。安倍首相の祖父の岸信介は、「満州」植民、中国人強制連行の責任者だった。

六ヶ所村新納屋地区には、いま、小泉金吾さん一家しか住んでいない。立ち退きさせられたのだ。神社だけが集会場として残った。わたしたちはその部屋で、70年から開発反対運動をしてきた種市信雄さんの話を聞いた。小泉さんにも生きていて会って頂きたかった。大工だった彼も、大湊海軍に徴用されていた。きっと虐待されていた「徴用工」のひとたちの姿を見ていたはずだ。

日本と韓国の「負の関係」を清算するためには、「被告企業の賠償」が必要だ。そして秋田県大館市のような、「殉難之碑」の建設や謝罪が必要だ。いまからでも遅くはない。

「八月の三日間、その後」

■ 嶽本あゆ美 (劇作家)

毎年、夏から秋にかけて全国各地では芸術祭が盛んに行われる。さて、この夏のアートシーンの話題は「あいちトリエンナーレ2019」一色になってしまった。そこでの「表現の不自由展・その後」が展示中止となった詳しい経緯は省く。開幕した8月1日からの3日間で、まず日本国内の空気がガラッと変わり、あらゆる「不自由」が露呈された。

まず「不自由」なのは政治家だ。少なくない政治家が、どちらかという現行憲法や人権や芸術を擁護しない立場であることが明らかにされた。そして驚くほど文化行政の感覚が前近代的で、検閲を為政者の権利だと勘違いし、当人たちは間違いを恥じることもない。

次の「不自由」は法治だ。展示への脅迫は、本来ならば犯罪であるにも関わらず、FAXの送り主を一人逮捕しただけで、小学校などへのテロ予告犯は捕まる気配もない。街頭では「増税反対」の声を挙げただけの市民が排除され、明らかに警察力、法律の恣意的な運用が続いている。封建時代に逆戻りだ。

最も「不自由」なのは言葉だ。ノン・バーバル（非言語）・コミュニケーションであるアートを、言葉が追い詰めている。多くの芸術作品は観客と対面して初めて命を持つ。鑑賞という体験が観客の情動、思考に作用し、コミュニケーションが成立する。観客は芸術から読み取ったものを言語化してもいいしなくてもいいが、他人にそれを押し付けるのはルール違反だ。ところが現状では、芸術は鑑賞される前にメディアにより情報として切り刻まれ、言葉の十字砲火を浴びている。大多数の人が沈黙し、自ら判断し言語化する能力を次第に後退させていく。裸の王様を見て、「王様は裸だ！」と言葉が出るうちは、まだましなのだ。

さて、くだんの「平和の少女像」を慰安婦像と捉える人々は一体何に怒り、「傷つけられた」

と憤っているのだろう。かつて軍隊が慰安所を必要とした事は明らかであるが、怒れる人々は慰安婦を売春婦だと決めつけ、それを振りかざすことで免罪されようとする。そして元慰安婦を蔑む歪んだ「カースト観」を持っている。そのカーストとは、最も優位なのが英米の白人、アジア人は日本人より低く、最低は性搾取が容易な女性だ。商売女だから何をしても許されるという感覚は、この差別感情によって担保されているし、現代の性犯罪被害者に対する攻撃や抑圧も、少女像へのバッシングと同根だと言える。

ところで、慰安婦問題を自らが属する国や歴史への侮辱だと感じる人々には、売春制度を支えたのもまた国家であることを忘れないで頂きたい。元々、吉原など江戸の遊郭は幕府が設置し、遊女は大門の中を職住の場とし、年季（借金）で縛られた。明治以降の公娼制度では、警察が娼妓芸妓を鑑札制度により管理した。例えば半玉と呼ばれる芸者の見習いが一本立ちする試験の時には、警察官がそれに立ち会う。そして公設民営遊郭の設置許可は県知事が出した。つまり公権力による遊郭システムが、植民地や戦場でも官民一体でフル稼働したのだ。多分にして「平和の少女像」を見て憤る人は、そのシステムの擁護者か、罪を隠したいばかりに罵ってしまうのではないだろうか。明治以降、性の売買に敢然と反対した人々はごく少数派だ。人権を蔑ろにすれば、国家間の争いで人を兵隊として消費する社会がすぐにやってくる。皮肉にも「表現の不自由展・その後」は、芸術監督の企画意図を敷衍し続け、あらゆる場所で拡大進行している。その「不自由」に慣れた頃に何が立ち現れてくるのか？これから私たちはしっかりと見聞きし、真実を言葉にしないでいけない。自由が戻るその日まで。

*嶽本あゆ美（だけもとあゆみ）劇作家・メメントC主催
11月7～8日 座・高円寺2にて「女人往生環2一章 提希（いだいけ）」上演。

韓国を知ることとは私たちの「眼鏡」の歪みを知ること

■加藤直樹（ノンフィクション作家）

「文政権、反日の本性現す」「韓国のヒステリックな“低次元”抗議」「韓国が逆立ちしても日本に勝てない理由」「韓国・文在寅がまた大嘘！北朝鮮からもバカにされて『万事休す』へ」「裏切りの韓国。すり寄る中口や北にもソデにされる文政権の断末魔」「今の韓国は正常な国ではない」「『反日』ヒーローの正体」「日韓対立を都合がいいようにしか報道しない『韓国紙』の呆れた体質」「日・ロ・中・朝から袋叩きの韓国」「日本依存の韓国経済は崩壊寸前」

ネットメディアで拾った見出しだ。似たようなものはいくらでも見つけることができる。あふれかえっていると行ってよい。テレビでは、ある漫画家がボードに「断韓」の文字と共に豊臣秀吉のイラストを描いて掲げ、テレビにレギュラー出演している安倍政権御用達の政治ジャーナリストは、「今まで（韓国を）甘やかし」ていたので「甘えの構造からの脱却をはかる」というのが日本政府の考え方だ、と解説してみせる。連日引っ張りだこの元駐韓大使の著書のタイトルは『韓国人に生まれなくてよかった』だ。

これらの言葉の数々の底に流れるメッセージは何だろうか。それは、韓国は異常な「反日」国家であり、韓国人は無能で愚か、感情的で思慮に欠けた集団であり、日本と日本人は彼らより優れているから、日本に刃向かう彼らの目論見は必ずや破たんする——といったところだろう。

文在寅政権の人事聴聞会で多くの疑惑を追及されたチョ・グク氏を指す「タマネギ男」といった言葉が、嘲笑とともにワイドショーを賑わしたことは記憶に新しいところだ。日韓のすべての差異が、日本が正常で韓国が異常である証拠、日本が優れていて韓国が劣っている証拠として解釈される構造も見える。さらに、韓国側からの批判はすべて「反日」となり、さらに奇怪なことに「甘え」となる。

韓国についてのこうした論調は、昨日今日

始まったものではない。嫌韓本が書店に並び、ネットに嫌韓書き込みがあふれるようになったのは2000年代初頭からだが、それさえも起源ではない。

たとえば1919年の三一独立運動時の日本のメディアの報道を見てみよう。

この年の3月1日、民族代表としてソウルに集まった宗教指導者らが「三一独立宣言」を発すると、「大韓独立万歳」を叫ぶデモが全国に拡大した。これが、三一独立運動である。当初、日本のメディアは「大多数の朝鮮人は独立の何たるやを理解して騒動に加わりたるものに非ず。一時の群衆心理的衝動に出たるもの」と嘲笑した。しかし運動が拡大していくと、今度は「悪辣なる野心教——煽動者は米宣教師」と国際的な「反日」の陰謀をにおわせ、さらに運動のきっかけをつくった天道教（東学）の指導者の真偽不明のスキャンダルを書き立てた。いわく「独立運動を利用して…朝鮮国王たらんとするの大野望を抱いて居る」「宏壯の邸宅を構へて数名の妾を蓄へ」ている、といった具合だ。

運動の展開を伝える報道も歪んでいる。憲兵隊の射撃でデモ隊から死者が出ても当然のようにあっさりと書く一方で、群衆の反撃で憲兵にごくわずかな死者が出ると「壮烈」「惨殺」といった文字が躍った。「最早示威運動者にあらずして暴民」「鎮撫せざれば其危険凶り知るべからず」としてメディアは強硬策を政府に求める。なぜなら、朝鮮人は「緩むれば附上がり、嚇せば縮む鮮人の通有性」をもつからだ。要するに日本に甘えてつけ上がっているのだから、ガツンとやってやれ、というわけだ。

朝鮮民族は異常な「反日」集団であり、朝鮮人は無能で愚か、浅はかな連中であり、日本と日本人は彼らより優れているから、日本に刃向かう彼らの目論見は必ずや破たんする——2019年と全く同じメッセージがそこにある（ついで

に言えば、今年3月1日、三一運動百年を記念する式典がソウルで開かれたが、日本政府は特使を派遣するどころか「渡航注意」で応えた。式典参加者が暴徒化して日本人観光客を襲うとも言いたいのだろうか。

日本のメディアが100年前と同じ韓国像を描いてみせている事実を、私たちはどう見るべきだろうか。二つの解釈があるだろう。一つは、日本のメディアは今も昔も事実を伝えているのであり、そこから分かるのは、韓国人は100年前から、実際に異常で浅はかな「反日」集団だったのであり、日本に「甘えている」のだ、という見方である。だとすれば、問題の解決は連中にガツンとやってやることだということになる。もう一つは、日本のメディア（と社会）は、100年前と変わらない歪んだ視線を韓国と朝鮮民族に向けているのであり、問題の本質は韓国の側ではなく、それを歪めて見る日本人の「眼鏡」の側にある、という見方だ。この場合、問題の解決は私たちの眼鏡を見直すところからしか始まらない。

私は後者だと考えている。韓国のことに限らないが、私たちは事実を無編集のままで、ありのままで認識することはできない。必ず、歴史的に形成された世界観、認識の枠組み、つまりは「眼鏡」を通して見ることになる。日本人の韓国・朝鮮観もまた、歴史的に形成されたものであり、その「眼鏡」を通すと、どれほどの膨大な情報も、どのような新しい展開も、すべて、愚かで感情的で甘えた「反日」集団である韓国・朝鮮人という像に翻訳されてしまう。眼鏡は、かけている人には存在を意識させないから、本人は本当の韓国を客観的に見ているつもりでいる。

韓国を知るとは、韓国を見る私たちの「眼鏡」の存在に気付くことだ。眼鏡の存在に気付く、その歪みに気付かなければ、新しい眼鏡を作ることはできない。さらに言えば、その作業を通じて初めて、私たちは日本という国のリアルな姿を見ることができる。韓国を歪めて見ているということは、日本を歪めて見ているとい

うことであり、韓国を知るということは、日本の本当の姿を知るということだ。実際、韓国について学ぶなかで、私の日本観は大きく変わった。

韓国を見る「眼鏡」の歪みは、一般に思われているより根深いものがある。それは単に右翼や権力者のものではなく、「進歩的」であることを誇る知識人のものでもある。侵略の「反省」といった倫理的な次元の話でもなく、主観的に「友好」を願えばいいのでもない。それは少なくとも近代150年、戦前と戦後を貫いて継続する認識の枠組みだ。古く歪んだ韓国観が再生産される今、それを変えたいと思う方は、ぜひ、「眼鏡」を可視化するための作業を試していただきたいと思う。

例えば最近、『密偵』（2016年）、『空と風と星の詩人～尹東柱の生涯～』（2016年）、『金子文子と朴烈』（2017年）、『1987、ある闘いの真実』（2017年）、『工作 黒金星（ブラック・ヴィーナス）と呼ばれた男』（2018年）などをはじめ、近現代史を描いた優れた韓国映画が続々と公開されている。『韓洪九の韓国現代史 韓国とはどういう国か』（平凡社、2003年）のような面白く刺激のある歴史の本もある。手前みそながら、民主化運動を描いた拙訳の漫画『沸点 ソウル・オン・ザ・ストリート』（チェ・ギョソク著、ころから、2019年）もお勧めだ。そうしたものに触れて、韓国認識が揺さぶられる経験をしてほしい。その向こうでかすかに日本認識が揺さぶられる感覚に注意を向けることができれば、さらにいいと思う。

嫌韓扇動のなかで、古く歪んだ韓国観が再生産されている。だがこの20数年で、日韓両国とそれを取り囲む世界の現実はかつてとは大きく変わった。韓国の人々の思いや認識に触れることができる機会も増えてきている。日本人の「眼鏡」と現実の落差は、もはや悲惨なレベルと言ってよい。ヒステリックで醜い嫌韓は、その断末魔である。ひどい時代だが、日韓のよりよい関係をつくっていきたいと考える人々の側に、現実の歴史の流れは味方してくれるはずだ。

高江の現状

■ 清水 暁 (沖縄県高江「ヘリパッドいらない」住民の会)

いつもご支援、座り込みのご参加ありがとうございます。

2019年4月3日と7月2日の2回、座り込みテント、備品などが米軍により持ち去られることがありました。2回とも夜に行われました。初めの撤去のすぐ後、この件を赤嶺政賢氏(日本共産党衆議院議員)が国会で質疑・抗議してくれました。持ち去った根拠を質問したところ、「地位協定に基づく措置と認識している」と他人事のような岩屋 毅防衛大臣の回答がありました。住民が「テントを張っていた場所は県道沿いであり、共同使用となっている。管理者は沖縄県だ。県の許可なく勝手に米軍が持ち去ることは許されない」と抗議しました。私たちは上京、沖縄県選出野党国会議員でつくる「うりずんの会」と共に、5月25日、防衛省、外務省の要人と話をする場を持ちました。「このような蛮行はやめるよう米軍に言ってほしい。持ち去った物も元に戻してしてほしい」と訴えました。米軍によると、昨年、県にも国にもテントの撤去を要請したが動かなかったのが、米軍が行使したということでした。国の答えは、「日米地位協定に基づき～」の文句を繰り返すばかりでした。「撤去の撤回を米側へ要請することは出来ない。このような要請があったことは米軍に伝える」の回答にとどまりました。

この話合いでわかったことは、日本政府は日本の政府であるのに、米軍の意向に従うことにのみ心を砕いており、住民の立場については「何も考えていない」ということ、そして主権が奪われ沖縄が植民地化されている現



テント強制撤去後の高江の様子

状です。もう一つ分かったことがあります。私たちが淡々と座り込みをすることは、思った以上に効果があるということです。

どうして、世界最強と言われる米軍が小さいテントをなくすのに夜コソコソと持っていくのでしょうか？(日本政府もコソコソしています)

日々、米軍がオスプレイを低空で飛ばすなど訓練している場所は、沖縄が米軍の占領下におかれていた1957年に一方的に摂取したところであり、たくさんの動植物が生息し、人々が暮らしを営んでおり、本島の6割の水を供給するダムのある水源地であること。それをやめてほしいと訴えている人々が目の前にいること。米軍としては、その不当な現状が座り込みにより可視化され続けるので、苦しいのだと思います。

今、国はすごい勢いで宮古島などの南西諸島の軍事化を進めています。きちんとした説明も出来ないような危険な基地を無理やり作ることは許されません。軍事による解決などあるのでしょうか？これからも座り込みを続け、伝え合い、つながり、そしてあきらめずに活動していきたいと思っています。

報告 仙台教区平和旬間 ウェイン・バートン司教(那覇教区)講演会 (2019年8月12日 元寺小路教会)

~平和を願い 神さまからいただいたいのちの大切さに向き合う~

仙台教区は2019年平和旬間に、ウェイン・バートン司教（ウェイン司教）を招き、講演会を開催しました。ウェイン司教は、今年から日本カトリック正義と平和協議会の担当司教にも就任し、会長の勝谷太治司教とともに正義と平和のために働くことになりました。以下では、ウェイン司教の講演を抜粋して報告し、沖縄で平和のために生きるウェイン司教を、改めて紹介いたします。

沖縄の苦しみ

奄美大島から琉球には、一つの小さな文化圏があります。小さな文化なので、他者に心を開いて、仲良くしなければやっていけない。そんなところから、非暴力の思想が生まれて来たのだと思います。沖縄では、お茶2杯飲めば友だちだ、と言われる。1杯ではただの挨拶、2杯飲んで時間をかければ、みんな友だちになるのです。

歴史的にも沖縄は、中国、日本という大国の狭間にあり、両国に対して2面的な外交をうまく行って来た。ところが薩摩藩がやってきて、沖縄は無理やり、日本の藩となり、県となりました。「ヌチドゥ宝」は、琉球王国最後の王、尚泰王の言葉といわれます。「王国は終わります。日本と戦う武器はない。でも戦わないで。受け入れたくない苦しみがあります。だけど命が大切」。そして、差別が始まり、沖縄の言葉が禁じられました。太平洋戦争では、沖縄は本土の捨て石となりました。戦争が終わると、土地を接収され、米軍基地が作られ、ベトナム戦争では戦闘機が飛びたち、沖縄は再び戦争に近くなりました。1972年、沖縄は日本に復帰し、他の県と同じようになると信じたが、そうではありませんでした。差別は続き、いまも、アメリカ政府も、日本政府も沖縄の声を聞きません。

ウェイン司教の沖縄宣教

1978年、20代で日本に宣教師としてやってきま

した。その時の沖縄はとても貧しかった。沖縄の女性と米兵との間に生まれたダブルの子どもがたくさんいました。カプチン会がその子たちのために学校を作り、その子たちと一緒に働きました。日本につい



ミサ中のウェイン司教
(2019年8月12日、元寺小路教会大聖堂にて)

た頃、日本語がわからない。バス停で座っていても汗が吹き出る。隣のおばあちゃんが、私を、団扇であおいでくれている。おばあちゃんの方をみると自分の方を扇いでいるのに、見ないと私に風が来ます。私の国が、おばあちゃんの家族をたぶん殺しました。家も失いました。それでもおばあちゃんは、私を扇いでくれた。あの風に慰めを感じた。慰めと許しと。おばあちゃんはきっといま天国にいるでしょう。あの風に祈りました。このようひとたちから、私は離れられません。

平和への想い

コヘレトの言葉が浮かびます。勉強してもお金があっても仕事しても虚しい。自分のことだけ考えて、これしてもあれしても虚しい。社会的にも、基地、戦争、自然破壊、原発。虚しいことです。しかし私たちは特別な力がある。キリストは私たちの平和です。上にあるもの、すなわち天のたまものである平和を求めなければなりません。

戦争が近くにある沖縄の人には、よく見えません。戦争になると、私たちが最初の犠牲者になります。大きな基地を作っても、私たちを守ることはできません。私たちの命とは関係ありません。ゆるし、寛大さを持って全てを成し遂げるのです。キリストのように考え、行う。そうしたら、戦争の話はないはずです。

(文責・日本カトリック正義と平和協議会事務局)



貧しさと弱さの側にある正義〈神〉

■ 宇井彩野 (フリーライター)

私が生まれた時、世界にはすでに数千年もの昔から「神」という概念があった。カトリックの幼児洗礼を授かった私は、「キリスト教の神」の存在を子どもの頃から教えられて育ち、「神」と呼ばれるものが何なのかあまりピンとこない、よくいるタイプのボン・クリスチャンになった。しかし近頃では、神を正義と定める聖書の言葉が、私にとって最もしっくりくるように思える。

私自身の信仰と切り離せないものとして、JOC（ジョック）カトリック青年労働者連盟での活動がある。学校を卒業し働き始めた頃に、すでに私の中に、働くことは苦しいことというイメージがあった。学生時代をともに楽しく過ごした多くの友人たちが、職場のパワハラや過重労働に青ざめた顔をしていた。それを耐え抜くのが「社会人」だと世間では言うけれど、本当にそうなのだろうか。そんな疑問を、一人もやもやと抱えている時に、JOCと出会った。

「苦しめられず働きたい」という思いは、変わり者の私だけが抱えている突拍子もない願望ではなかった。歴史の中で労働者はずっと、人としての尊厳を持って生きられる社会を求め続けていた。世の中で心細く孤立した点のように見えていた私の思いは、労働者の歴史と、現在も虐げられる人々の権利獲得を志す人たちとの、縦と横のつながりの中にしっかりと在った。

かつての私のような、「孤立した点」である自分しか知らない若者をつなぎへへと導き、尊厳のために闘う人として養成していく稀有な運動がJOCだ。すでに問題意識を持って動ける人ではなく、問題意識を持たない若者や問題意識をどう表現すればいいか知らない若者を目覚めさせ、運動の担い手として育てることをミッションとしている。そして、個人的な体験や思いが他者や社会と接続していると知ることが、養成の大切なプロセスとなる。

旧約の時代すでに、迫害と貧しさからの解放は、常に民衆の希求するテーマになっていた。時代背景や細かな語義については深く理解できていないかもしれないが、イスラエルの民の祈りの叫びに、現代人の私も共感を覚える。

祈りの叫びそのものともいえる詩編を読むと、「神に逆らう者」がさまざまな言葉で表されており、それは一貫して貧しい人、弱者、虐げられる人々と対比される。彼らは「繁栄の道を行く者や悪たくみをする者」（詩編37.7）とも表現されている。続く箇所には、

主に逆らう者は剣を抜き、弓を引き絞り
貧しい人、乏しい人を倒そうとし
まっすぐに歩む人を屠ろうとするが
その剣はかえって自分の胸を貫き
弓は折れるであろう。

主に従う人が持っている物は僅かでも
主に逆らう者、権力ある者の富にまさる
（詩編37.14-16）

と、さらに「貧しい人の命を奪う権力者」であることを明示している。彼らは「敵軍」や「異邦人」と表される箇所も多く、背景を見なければキリスト教保守派の根拠とされる危うさもある。しかし私を感じ入るのは、当時の人々が、正義〈神〉は権力者の側でなく、貧しく虐げられる人の側にあると信じていたことだ。むしろそんな「きっとあるはずだと信じる正義」を「神」と名付けたのではないだろうか。

現代社会に、権力や富を持つ人は優遇されて然りとする価値観は根強い。私が運動を通じて出会った多くの若者も、その価値観を内包し、成功者になることを「まっとうな人間の道」と信じ、それができない自分を責めていた。

権力者に従うのではなく、貧しい人・弱者の側にある正義〈神〉に従うことを知らない若者たちの正義感は今、惑わされ、苦しみの中にある。

目次

特集 韓国と日本

- 1 2019年第5回「日韓脱核巡礼」東北 …………… 光延一郎
 - 4 日韓脱核巡礼団に同行して …………… 鎌田 慧
 - 6 八月の三日間・その後の現在進行形 …………… 嶽本あゆみ
 - 7 韓国を知ることは私たちの「眼鏡」の歪みを知ること …… 加藤直樹
 - 9 **新連載** 高江・新月の森から… 高江の現状 …………… 清水 暁
 - 10 報告 仙台教区平和旬間 ウェインバート司教(那覇教区)講演会
～平和を願い 神さまからいただいたいのちの大切さに向き合う～
 - 11 **新連載** シロツメクサの花かんむり
 - 11 貧しさと弱さの側にある正義(神) …………… 宇井彩野
 - 12 まんが「修練者の石橋さん」
- etc 事務局

表紙写真 「あさこはうす」の日韓脱核巡礼一行 (2019年8月30日)

JP通信217号 p.8「ほよ～んに参加して」(原慶子) 文中に下記の誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

(誤) この相談会のチラシは今回はじめて福島県の郡山市、いわき市の教育機関を通し、子どもたちの手元に確実に届けられるように配布されました。

(正) この相談会のチラシは、今年は、福島県、二本松市、いわき市の自治体、教育委員会の協力のもと、小学校・幼稚園・保育園を通して、子どもたちの手元に確実に届けられるように配布されました。



各地からの報告

事務局より

正義と平和の50年

正義と平和 えとせとら…

日本カトリック正義と平和協議会が司教協議会の一委員会として発足したのは、1970年。この発端は、第2バチカン公会議が終了してから2年後の1967年、教皇パウロ六世が教皇庁に「正義と平和委員会」を設立したことにあります。教皇は全世界の教会にも「正義と平和」の活動を呼びかけ、これに応じて作られたのです。来年2020年、「正平協」は記念すべき50年目を迎えます。1995年、それまでの25年間に記念して、『「正義と平和」の25年』が刊行されました。50年目の来年も、50年誌を発行しようと、このたび、「50年誌編集委員会」が発足しました。過去を振り返り懐かしむだけではなく、日本の教会が「正義と平和」の実現のために、今後どう動いていくべきか、皆さんに問いかける、未来を見据えた50年誌にしたいと考えています。

編集後記

今回から2つの新しいリレー連載が始まります。一つは、「シロツメクサの花かんむり」。3年間の予定で3人の方が執筆リレーを続けます。「正平協」らしくらぬ、なんと乙女チックなタイトル!と思われる方も多いと思いますが、春の野原で花かんむりを編むのに使われるシロツメクサ(三つ葉のクローバー)は、三位一体の印として、アイルランドの聖人パトリック(4～5世紀)が宣教に使ったと言われます。3人の執筆者が、それぞれの持ち味を生かしてつながり、最後にすてきな花かんむりとなることを願います。もう一つは沖縄県高江の状況を、「ヘリパッドいらぬ住民の会」の方々に順番に、1年間報告していただく「高江・新月の森から」です。ヘリパッドは完成し、すっかりニュースでも扱われなくなってしまいました。高江は今、どうなっているのでしょうか。住民の方々は諦めてしまったのでしょうか?いいえ!みなさんテントを張り直し、国内外の人たちと広く連帯して、今も粘り強く抗議活動を続けています。新月の暗がりの美しい森から響く、「正義は、富や権力の側にはないこと」(p.11)を証す声を、この連載が伝えられたら幸いです。



vol. 218
2019 OCT.

発行日 2019年10月1日(隔月発行)
編集発行 日本カトリック正義と平和協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
TEL.03-5632-4444 FAX.03-5632-7920
E-mail jccjp@cbcj.catholic.jp

購読料 年 1,500円(送料共)
郵便振替 00190-8-100347
加入者名 カトリック正義と平和協議会

<http://www.jccjp.org>